

腎癌の検査

について

日本臨床検査専門医会
下澤 達雄



■腎癌にはどのようなものがありますか？

大きく2種類に分けられます。1つは「腎細胞癌」、もう1つは「腎盂癌」です。「腎細胞癌」は、腎臓本体から発生する癌で、一般にいわれる腎癌はこのタイプで、腎臓にできる癌の約9割を占めます。また腎盂、尿管、膀胱、尿道の一部にできる癌は「腎盂癌」になります。こちらは膀胱にできる癌と同じ種類の「移行上皮癌」に分類されます。さらに、小児に発生する「ウィルム腫瘍」があります。

■腎癌はどのような人がかかるのでしょうか？

腎癌は全ての癌の中で、比較的稀な癌とされていますが、年間に腎癌で死亡する人は約3000人以上とされています。

腎癌の患者は男性が多くなっています。また年齢的には約60歳で罹るのが一番多いといわれています。

肥満、喫煙は危険因子であり、また、有機溶媒や金属を使用する労働環境は誘因となります。一部優性遺伝性に腫瘍ができる病気もあります。

また、透析を受けている場合は腎癌の発症率が高くなります。

■腎癌の見つけ方は？どんな時病院にかかったらいいですか？

腎癌は、小さいうちは症状がないため、超音波検査（左図）や、他の病気でCTをとった時にたまたま、小さい段階で見つかることが多くなっています。尿検査でも極わずかな血液や異常細胞が見つかり、それが腎癌の早期発見に繋がることがありますが、一般的には、顕微鏡を使わずに目で見てわかる肉眼的血尿を認められた場合、腎臓の超音波検査（エコー）を行います。前述のような腎癌のリスクのある場合には、腹部超音波検査、CTによる定期的スクリーニングが有益とされています。

■腎癌が疑われたらさらにどんな検査をすればいいのでしょうか？

多発することが腎癌の特徴です。つまり、ある腎臓に検査で1個の腎癌が見つかったときに、その腎臓の他の一見正常そうに見える部分にも画像検査では見つからない小さな癌が隠れていることがあります。また、手術時に癌のなかった反対側の腎臓に、のちに腎臓癌ができることも少なからずあります。そのため、腎癌が疑われた場合、主にMRI、CT、超音波診断、血管造影などを組み合わせて検査を行います。より鮮明な血管像、組織像を得るために、造影剤を使うこともあります。

■腎癌と似ている病気は？

腎嚢胞と腎血管筋脂肪腫が代表的なものです。どちらも良性で、ほとんどは経過観察ですみます。腎嚢胞は腎臓内の水のつまった袋状構造のことです。まれに大きくなって腰痛を起こす事もあります。腎血管筋脂肪腫は血管と筋肉と脂肪からできた腫瘍です。すこしずつ大きくなり、時に出血や疼痛をおこすことがあります。

